■前角老師追悼■

# 孤雲飛翔して大山元不動

第三回育英生　島崎義孝

日本時間の五月十五日未明、前角老師遷化――の訃報は瞬く間に世界に知れ渡った。数日を経ずしてアメリカ各地、ヨーロッパからも十余人の高弟、弟子が遺体の安置してある東京品川にある桐ケ谷寺に参集した。これより数日前、アメリカ帰国前には拙寺にも来駕いただく予定で電話も頂戴し、こちらもその心づもりをしていたが、訃報を聞いて一瞬わが耳を疑った。まさか、――とは誰の口からも漏れる言葉だったと思う。

通夜が十九日の夕刻桐ケ谷寺でいとなまれ、葬儀が二十日に同寺に隣接する桐ケ谷斎場で行なわれ多くの会葬者があったが、これは密葬であり本葬は改めて老師の本拠地であるアメリカ、ロサンゼルスで百か日を期してもたれることになっていた。

老師がそのアメリカで始められたロサンゼルス・ゼン・センター（Zen Center of Los Angeles 以下ＺＣＬＡと略す）は、一九八二年以来、マ

ウンテン・センターで毎年五月上旬から八月下旬にかけて夏安居が行なわれているが、今年のそれは二か月で終了し、ここ一月ばかりは放参も返上、センターのメンバー総出で本葬の支度に携わってきたという。彼らにとってみればまさに前代未聞の大掛かりな仏式の葬儀で、しかも日本からの多くの参列者も見込まれるため、たとえば式次第のようなものにしてからが、日米両国語を用意しなければならなかった。

八月二十五日にはアメリカ国内はもとより世界各地から、多くの人々がロサンゼルス市内南ノルマンディー街にあるＺＣＬＡ（日本名は仏真寺）に集まった。日本からは仏真寺の本寺であり老師の故郷でもある栃木県大田原市の光真寺、老師の初住寺である桐ケ谷寺、ＺＣＬＡへの留学僧の派遣元である横浜善光寺一行、さらには曹洞宗代表の方々など有縁の人々がはるばる波濤を越えてカリフォルニアに飛来した。一行はＺＣＬＡの開山堂に型通り拝塔、五鑿三拝をすませ、その夕刻には関係者一同がセンターの中庭で精進バーベキューを囲みながら前角老師を偲び、また久闊を叙しあった。この日はいわば到着だけのことであり、葬儀のすべての行事はこれから三日間にわたるのである。

翌二十六日は午後の比較的遅い時刻から始まった。というのは逮夜が営まれるからである。前角老師には十二人にのぼる嗣法者がいるとさ

れるが、師の遷化後は一番弟子であり、ニューヨーク州ヤンカース市でニューヨーク・ゼン・コミュニティ（ZCNY）の主管、バーナード・徹玄・グランスマン師がZCLAの跡を享けることになっていた。同師はZCNY主管のままでZCLA住職をも兼ねるのだが、すべての式に先だってその晋山式が簡単ながら、一同が見守る中で執り行われ、開山堂に報告された。ZCLAは一九六七年に設立されたものだが、老師の実父であり、受業師でもある黒田白純師が開山になっている。また、ここには老師の参禅の師だった三宝興隆会の安谷白雲師、また武蔵野般若道場の苧坂光龍師の尊像・位牌が置かれている。そこにさらに日本から持ち帰られた老師の遺骨が安置され、実弟でもある善光寺住職黒田武志師の導師で安骨の法要が営まれた。そして安骨の法要が終わると、引磬、鼓、鈸、さらにユダヤ教徒の用いるショーファー（shofar）

開山堂にむかう両班（ロス禅センター）

と呼ばれる角笛が交互に鳴らされるなか、十二人の弟子がそれぞれに老師の遺骨や遺影その他奉書に包まれた愛用の仏器などを携えて中庭に現われた。外で待ち構えている参列者の中を輿に乗せられた遺骨が通り抜け、すでに設けられた祭壇の前に安置され、逮夜が始まった。

逮夜は九仏事師の内五人が立ち、実に丁寧な手順で行なわれた。日本でもあまり見られないという法式で執行されたのには、去る四月に一カ月にわたりサンフランシスコ北方のグリーンガルチでの特別摂心で采川道昭師（山形県、宝泉寺住職）による法式の指導を受けていたからに他ならない。まず、入龕仏事の導師としてサンフランシスコ・ゼン・センター（以下、SZCと略す）の正文・タナス師が香を薫じ、続いて移龕仏事を禅敬ハルトマン師、鎖龕仏事を秋葉玄吾師（バークリー、好人庵）、掛真仏事を天心・アンダーソン師（SZC）、そして引き続き知野弘文師（ロズガトス・ゼン・センター）が故人への思いを込めて一句を吐かれた。

それにしてもアメリカ社会はやはり日本と大きく異なるという思いをせずにはおれなかった。ひとしきりの式が終わると最後に、任意に弔辞を述べる機会があるのだが、老師の思い出や、感謝の想いを語るその語り口がいかにも直截で、人々にアピールしようとする気持ちがよく現れていた。故人への想いは自分自身で密かに反芻するものだと筆者などは思うのだが、ここではそうではないらしい。祭壇の前に進み出て、哀惜の念を存分に示す。老師と長年かかわってきた数人の人々が立った。わけてもオレゴン州ポーランドで小児科医をいとなむ傍らグループを指導しているジャン・澄禅・ベイ師の弔辞は、いささか情に流されたきらいがあったものの、師という存在を失った人間の最も激しい苦衷を表していたように思う。

その後は中庭で休息の時間があり、この時には先ほどまでの緊張がとけてクッキーや飲み物を片手に、あちこちでこもごも歓談する様子がみうけられた。遠来の参列者はハッグを繰り返し、相互の近況を伝え合った。新たな知り合いが出来るのもこういう機会だ。筆者もたびたび自己紹介し、また受けた。まことに別れの時は同時に出会いの時である。葬儀の前日というのに参会者は三〇〇人以上にものぼっただろうか。老師が住まいされた隠寮にはもっぱらアメリカ国内の各ゼン・グループの代表や日本からやってきた人々が夕食を採りながら話し合っておられたが、中庭でも歓談は続き、夕暮れの遅いロサンゼルスの日が沈んでもそれは尽きることがない。私事にわたるが、一九八八年秋、老師の高弟の一人であるメッルテエル・玄法・デニス師率いるカンゼオン・サンガ（現在はユタ州ソルトレイク市）の人々について、数か月間ヨーロッパ各地を摂心行脚した時に知合った懐かしい顔もちらほら見られ、またも老師の導きかと感極まるものがあった。この摂心行脚は実に老師の強い意志によって実現したものだからである。

明けて二十七日、いよいよ本葬の朝を迎えた。日本では齋会のさいの献粥というのは、早朝に文字通り粥を差し上げるものだが、ここではいったい何が用意されるのかと興味をもった。側近の弟子たちは老師の日本食好みを先刻承知しているが、教育が徹底していたものとみえて、日本でやるように仏具膳に飯、汁、二種盛、それに箸を添えて供えてあった。今回に限って彼らはこれをブランチと呼んでいた。ブランチというのは日曜日に採る朝食とも昼食ともつかない食事のことだが、たしかにこの日は日曜日にあたり、遅いめの献粥でよかったのだが、定中

の老師も苦笑されていたのではないか。創設時からの決して広いとはいえない禅堂兼本堂で、大勢の人々が見守るなか、ノーマン・蔵傑・フィッシャー師（SFZC）の導師で行なわれ、箸を飯の上に立てるとこまで実に如法だ。そしてそれに引き続いて、盛装で威儀を糺した一同が舎利礼を唱和するなか、十余人の遺弟によって、それぞれのセンターに持ち帰る分だけ分骨された。聞くところによるとアメリカでは荼毘に付す場合ふつう遺骨を拾うことはないそうだが、今回彼らはどのような思いで分骨に臨んだのだろうか。密葬のときすでに経験している人たちが大部分だったが、いろいろな意味で彼らにとってこの葬儀は新しい経験になっただろう。

この儀式を終えると、これより遺骨や遺影を抱いた弟子、法類の行列は葬儀会場にあてられているダウンタウンの日米文化会館に向かうはずである。何台もの車に分乗した葬列は、前角老師に因縁のあったいくつかの場所を途中で訪れることになっていた。まず、現在のZCLAから北へ約三キロのセラノ街にあった旧センターの跡地を訪れた。ここは一九六七年に老師が独立して初めてグループを組織し、十人ばかりの若い人々の指導に当たられたZCLAにとってはいわば記念碑的な場所である。現在地のノルマンディーに移ったのは翌年である。一九八八年、筆者がZCLAの記事を書くため資料集めをしていたときにはその建物はまだあったが、いまではこぼたれてしまって何も残されていない。ただ相変わらず普通の住宅街のたたずまいをとどめているだけである。このセラノ街時代のことを知っているのはおそらく古くからのメンバーだけだろう。なにしろひとりの人間が一生に平均十何度も引っ越し、自分の祖父母、曾祖父母の墓がどこにあるのかよく知らないといった人々が大半を占める社会なのだ。この跡地

で諷経・回向。そこを起つと次に一行はダウンタウンに近い禅宗寺に赴いた。ここは今日では北アメリカにおける曹洞宗の総監部が置かれており、文字通り北米における曹洞宗の拠点であり、アメリカ各地のゼン・グループと日本の本山を結ぶ核にもなっている。もともと日本人あるいは日系人にとっては一種のエスニック・チャーチだが、また、ゼンに興味のある人々には坐禅の行なえる道場になっている。行列がここに立ち寄ったわけは、老師が一九五五年に赴任し、一九六六年に至るまでのちょうど十年間ここで開教師として過ごされたからである。おそらく老師にとってもこの六十年代中葉は重要な時代だったと思われる。というのも当時、〝ゼン〟という言葉がようやくアメリカの青年層に膾炙し始め、実際に指導者を求め始めた頃であり、そうした時代の要求に応えるべく、自らの修行の仕上げを決意されただろうからである。ここにいながら時代の空気が変転するさまを悉さに肌で感得しておられたはずだ。ここでも諷経・回向。

禅宗寺をあとにすると、午後一時には霊龕は数ブロック先にある日米シアター前に辿り着いた。日米シアターは日米文化会館の附属施設で、これらの施設はその名称が示すように日米両国の相互理解を促進するため在米日本企業、在米の日本人あるいは日系人、日本大使館などの尽力で一九八四年に完成したものだが、日米の懸け橋の役割を果たしてこられた老師の葬儀にはうってつけの会場だったかもしれない。車から降りた一行二十数名は再び列を整え、葬列を開始した。先頭の維那子が十仏名を唱え、継いで欠の引磬、鼓、ショーファーの一団、そして弟子・法類の順での、両側に関係者が待ち構える間を整然と会場に歩を進み入れた。

会場の内外にはすでに定刻前から葬儀に列席

するために大勢の人々が参集している。大半が在家風の人たちだったが、関係の日本仏教各宗派の人々はもちろん、韓国仏教の人あり、チベット仏教の人あり、上座部仏教の人あり、はたまたユダヤ教の人などの姿もあり、まさにアメリカ仏教のおかれている一面を改めて垣間見た思いがした。いわゆる禅仏教の立場をはっきり示しながら、しかも他の宗派・宗教と協調していくことの大切さ、難しさをしばしば伺ったが、ここにも改めて老師の一面を垣間見た気がした。それはともかく、シアターでの葬儀は今回の中心になる行事だっただけに、センターの人たちは随分神経を使ったようだ。実際に儀式を執行するのは国籍も、言葉も違う遠来の人々であり、彼らの役割は会場の設定と儀式に流れを円滑にすることに限られていたといってもよい。したがって当日までは執行者のいないまま、何度もリハーサルを繰り返し、必要な仏具や備品を何度も確認しなければならなかったのである。これだけでも大変な作業だったろう。そうした接待や準備にかかわる苦労話を、式がすべて終わった後の休息日に聞かされようとは、この時筆者は夢想だにしなかった。

ここでも九仏事師による丁寧な儀礼が行なわれた。一般参列者はシアターの観客席に坐り、ステージには主立った人々が着座した。主賓に禅宗寺の主管であり、北米開教総監の山下顕光師が就かれ、導師の光真寺方丈を中心に左右に九人が仏事師が曲彔に座を占め、左側には遺弟衆が整列し、右側には老師の夫人である恵鏡氏、三人の遺児、法類、兄弟、親族などが参列された。日本から曹洞宗の管長専使として宗務庁教化部長の佐藤良彦師、両大本山専使として永平寺の松永然道師(国際部長)、總持寺の東郁雄師(講師)が出席された。本山の弔辞では老師の永年にわたるアメリカ開教の功績を讃えられ、

まだ早いその遷化を惜しむ言葉で結ばれており、改めて死を悼むの思いを禁じざるをえなかった。ただ、老師の日頃の口吻を借りて言えば、ひとり曹洞禅を宣揚されたのではないということだろう。汎く仏法という立場に立って多くの場所に積極的に赴いて、努めて人々に会い、交流を重ねてこられた老師のこれまでの行跡からもそれはいえる。だいいち、この地にあって現地の人々にはそのようなわが国での宗派意識は希薄であるし、それはなにより高祖禅師の遺志にも反する。立場上の挨拶であったと思う。そういう意味ではむしろハワイのロバート・エイトケン師の弔辞が老師の心境をよく伝えていたと筆者には思えた。同師はアメリカへの仏教伝導にかかわってきた先達者の名前を上げ、これらの人々に匹敵する業績を上げた一人として老師を位置付け、積年にわたる友情と交友とに深甚の感謝の意を表された。おそらくこれがもっとも一般的なアメリカ人の老師に対する意識ではなかっただろうか。対真小参、香語が本山代表者によって唱えられた後、奠湯導師メル・ホワイトマン師、奠茶導師鈴木格禅師、そして最後に秉炬導師黒田光純師によってそれぞれの仏事が恭しく修行された。式は二時間にも及んだが、五百もの座席は満員で、焼香炉が回されるまでしわぶき一つないほど粛々と時間が流れていった。法要が滞りなく進行した陰では、采川道昭師と老師の実弟である桐ケ谷寺住職の黒田純夫師が都監としてあらゆる面に心を配り、宗務庁国際課長の山本健善師が裏に回って尽力された。

同じ日の夕刻、日本から大部分の参列者が宿泊していた近くのホテルで食事会が催された。狭い待合ロビーは人いきれで、一種の安堵感のようなものが漂っており、開場までの待ち時間には名物のカリフォルニア・ワインもふるまわ

れ、さながら誕生パーティか結婚パーティかと見紛うほどの明るさだった。司会者はいずれもゼン・センターに深いかかわりのある人たちで、しかもそれぞれの分野の達者である。日本語通訳になったはずの秋葉夫人ヨシさんが思わず米語を米語で通訳してしまい、各テーブルからどっと笑い声があがった。アメリカ生活が長く、ふとそのまま米語が口をついて出てきたのだろう。このように宴会は初めからきわめて和やかな雰囲気の中で行なわれた。歌あり、ダンスあり、トークショーまがいの出し物ありで、もしロビーに黒のリボンを掛けた老師の遺影が飾っていなければ誰もが何かお目出度い席だと思っただろう。いろいろな催し物がひとしきりあって一息つくと、やがて場内が暗くなり、老師の生い立ちやZCLAの歴史を刻むスライドが大きなスクリーンに映し出された。皆がしんみりしたのはこの時だろう。ちゃんちゃんこのようなものを着せてもらったまだ乳児の頃の写真から始まって、少年時代に家族と映した写真、学生時代、道場での行脚生活、本山での瑞世の記念写真、禅宗寺での開教師時代、ヒッピー姿の若者を多数交えて写した写真、ZCLA創設期の摂心後の記念撮影、野球帽をかぶって水まきをしている姿、コートを着て俯きかげんに散歩している様子、笑い顔、提唱の時の獅子口、弟子たちとの歓談、…。有髪でネクタイを締めた若かりし頃の老師の姿が写し出された時には場内から思わず歓声が上がった。走馬灯のように短時間でつぎつぎに替わっていくスライドを見ながら目に涙している人が何人もいた。彼らは決して余興だけを楽しんだわけではないのだった。それぞれの人がさまざまな思いを抱きながら帰路についたことだろう。

四十年前、神戸から貨物船に乗り込んだ一雲

水がアメリカ大陸の大地を踏みしめるまでには二週間を太平洋の波の上で過ごさなければならなかった。しかし、今日のようにジェット機が大空を駆け回る時代になっても日米の距離はやはり遠いと言わねばならない。くわえて今回のように大勢の関係者が一度に来るのは大変だ。そこで本来なら改めて一周忌にでも行なうべきかもしれないが、ちょうど百か日にもあたっていたためだろう、引き続き埋骨式も行なわれることになっていた。翌二八日、山のセンターが次なる会場である。早朝、ゼン・センターから十何台もの車に分乗してロサンゼルス東方一二〇マイル、アップル・キャニオンに抱かれたジャチノ山まで大挙して出掛けた。先発組も含めて少なくとも二五〇人を下らない人々が集まった。筆者の知るかぎり、毎年の夏安居のフィナーレを飾る首座法戦式にもこれほどの人数は集まったことはないだろう。車の騒音や、この頃ではドラッグの密売に絡む銃の撃ち合いでとみに治安の悪化するようになったロサンゼルスとは異なり、近辺はきわめて閑静で、松の巨木が林立し、野性の鹿やたくさんの野鳥を目にすることもしばしばある。このセンターは当初、みっちり坐禅・摂心したいというZCLAのメンバーの意向から一九七九年に始められたもので、多大の援助を惜しまなかった神戸、八王寺の故志保見道雲師を開山に迎えて創設され、道雲山陽光寺と命名されている。二〇万坪を擁する。何年か前の夏、ここでの摂心に加えてもらったとき、老師の裏山の急勾配を登りながら話しつつ、途中にたくさんの石を動かしたり土を均した辺りにさしかかると、足を止めて「そのうちに連中（弟子たち）とここに入るんですよ」と笑いながら言われたのを覚えている。「骨を埋める気持ちでアメリカに来ました」という言葉も何度も伺ったことがあるが、こんなに早くその

時期が来るとはご自身でも想像すらされなかったことだろう。

十一時にはいったん皆で禅堂に勢揃いし、遺骨を囲んで黙禱した後、いつものように鳴し物が先導して件の墓所に向かった。長蛇の葬列が砂漠地の急な坂道をたどる。鼻緒の草履ではすべりやすく、歩きにくい。墓所はすでにきれいに掃き清められ、埋骨式の支度はできあがっている。上方に「桐ケ谷三世、仏真二世、大山博雄大和尚霊位」と書いた真新しい木の墓標も立てられている。老師は思い半ばではなかったかと考えると、残念な思いがした。否、遺弟衆によって、自らが定めた墓所に懇ろに葬られるのはあるいは本望だっただろうか。焼香に煙が風に煽られてすぐに雲散してしまう。生前の言葉通りアメリカに骨を埋められたのである。しかし、これほどの覚悟をしなければ異郷での伝道など覚束ないものだろうか。慄然とした思いを禁じえない。

老師に骨を埋めるほどの決意を促させる何かがあったとすれば、その一つは自らをアメリカという土地に嫌応でも拘束する家族という存在ではなかっただろうか。単身であれば気儘に動くことができる。しかし、力にもなれば手枷足枷にもなる家族というものがあれば、自然どこかに落ち着かざるをえまい。晩婚だったが、十六歳の長女を頭に一男二女の子どもの父親でもあった。マウンテン・センターに至る途中を一〇マイル近く入ったところにアイドルワイルドという街があるが、ご家族はそこに住まいしておられる。しかし、多忙だった父が戻ったのは無念にも遺骨だった。老師はアメリカ国内では二箇所のセンターを見る責務があったし、弟子のセンターにも赴き、また、メキシコ、遠くヨーロッパ各国に摂心の指導に出掛けられることもあり、さらにセンターの運用の必要から日本

に戻られることもしばしばだったから、自宅で家族と過ごされる時間は決して多くはなかったはずだ。マウンテン・センターでの埋骨式を済ませると、今度はごく身近な人たちだけがその自宅に集まって安骨諷経をいとなんだ。三〇人ほどの人が入ると家の中はいっぱいになってしまった。老師が書斎にしておられた部屋には、すでに日本から運ばれていたのだろう、禅宗風の在家用仏壇が置かれていた。舎利礼を唱える中、めいめいに焼香、合掌して簡単ながらも自宅での法要も終了し、これで三日間にわたるすべての行事が無事済んだ。

老師が親孝行だったことは有名だが、遷化される前日、つまり五月十四日の母の日には多忙の中をわざわざ郷里まで墓参に出掛けられたという。数年まえに物故された母堂は「嘉」といわれ、「前角」姓は母方のそれを採られたものだし仄聞している。兄弟のなかでひとりだけ母方の姓を名のるにはそれだけの理由があったのだろう。その母堂と同じ名前を一番下の娘さんにつけておられる。一九八七年春、初めてこのお宅に伺ったとき、まだ小さかったこの嘉くんがどこから採ってきた花なのかブーケを作って、はにかみながら手渡してくれた。そこでふたりでスナップ写真を一枚ということになったのだが、この嘉くんも現在では十一歳の少女ざかりになっている。自宅での法要のため、参列客が家に入れ替わり起ち変わりしていたときにはしゃぎ回っていたが、汐のように押し寄せた人びとが三々五々帰途に就くと、涙顔をして皆を見送ってくれた。老師はこの子どもたちを残してどんな思いで逝かれただろうか。孤雲飛翔して大山元不動、定中照鑑。

（養玄寺住職）

慧鏡夫人の挨拶（密葬儀）

お子様たち